高田本山だより

泥の中から咲く蓮のように

111

源信1000年

親鸞聖人が七高僧のおひとりにあげられている恵心僧都源信和尚が西暦一〇一七年にお亡くなりになられて千年の月日が流れました。

諸宗派で法要が営まれたり、奈良国立博物館では記念の展示が行われたりしましたので、ご縁を結ばれた方も多いのではないでしょうか。

この紙面では、『今昔物語集』に書かれている源信和尚と母上の説話を通して、和尚のみ教えを再確認したいと思います。

源信は奈良県の生まれで、幼くして比叡山に登り、天台止観業などの学問を修めて止事無き（優れた）学生になりました。

三条の大后の宮の御八講（学習会）に召されて、朝夕二回、四日間にわたる八回の講義を終えて、多くの褒美の品を賜りました。初めて貰った褒美の品々を母上に見てもらいたいと、遣いに託して届けましたが、大喜びしてもらえるものと予想していた源信に、母上から思わぬ手紙が届いたのです。

「立派な学生になられたのは限りない喜びです。但し、このような御八講に出向くことを、あなたは結構なことだと思っているでしょうが、老母のわたくしはそうは思いません。一男四女で、元服もしていないあなたを比叡山に上らせたのは、学問して、貴くなって、わたくしの後世をも救ってもらいたいという気持ちがあったからです。にもかかわらず、世俗的な名僧として花やかに振舞っているのは本意に違う事です。わたくしは年老いてしまいましたが、生きているうちに、あなたが聖人になっていられるのを見届けて、安心して死にたいと思っていたのでした」

源信は母上の手紙を読み、泣く泣く返事を書きました。

「私は名僧でありたいという気持ちは更々ありません。只、母上にこのようなことがあったという話をお聞かせしたかっただけなのです。母上のご心配を喜しく思いますので、仰せの通り山に籠って聖人になるよう心がけます。自分の母を褒めるのもどうかと思いますが、あなたは極きわめて立派な善人（善知識）です」

母上からの二度目の返事は、

表紙は本山境内蓮池の風景です。「泥中生仏正覚華」の一節がある偈文は報恩講十五日の後夜でおつとめされます。

「今こそほっとして、安心して死ねる気がします。返す返す嬉しく思います。決していい加減な修行をなさってはなりません」

源信はこの二度目の返事を書物に巻き込んで、時々取り出して読み返しながら泣いていました。

山に籠って九年が過ぎた頃、母上の健康状態が思わしくない便りを受けた源信は母の住む奈良県に馬を早めて向かいました。久しぶりに対面した母上はひどく弱られていて、頼りなさそうでした。源信が「母上、只今帰りました」と大きな声で呼びかけると、母上は「命つきる前に会えるとは、母子の縁が深いからで、しみじみありがたいことですね」と息も絶え絶えに弱々しい声で言うのでした。源信が「母上、お念仏申して下さい」というと、母上は「そうは思っているのですが、体が弱って唱える気力がない上に、勧めてくれる人もいないのです」と返事します。源信は経文や偈頌の貴い言葉を言い聞かせながら念仏を勧めると、母上は道心を発して百辺ばかり念仏を申され、消え入るように亡くなられました。

源信は「母上は道心を発されて、念仏を唱えて亡くなられたから往生は間違いない。母上はわたくしを聖の道に勧められたので、このような結果になったのです。母は子のため子は母のためにこの上ない善知識なのです」と涙を流して横川に帰りました。

源信和尚は横川の恵心院に籠られて念仏三昧の求道に専念され、『往生要集』など私たちに大きな影響を与えることになった、多くの書物を著わされました。

『往生要集』は、経文中から重要部分を抜粋し、阿弥陀如来の極楽浄土に往生することを勧めた十章から成る整然とした体系をなす書物です。

源信和尚のふるさと

この『往生要集』の主旨を一枚の紙に要約したと言われている『横川法語』（『念仏法語』）を紹介します。

「生きとし生けるもの全ての中において、三悪道を避けて、人間に生まれるということは、大変希なことです。社会的な地位が低いと言っても、畜生より劣ることはありません。家が貧しいと言っても、もがき苦しむ餓鬼ではないのです。心の中に思うことが実現しないと言っても、地獄の苦しみには比べようもありません。生活の中での不満は、自分が愛おしいという証拠なのです。多くの人が、浅ましい心根を持っているということは、本当の幸せを願っているという証拠なのです。人間に生まれたことを喜ぶことが大切です。信心は浅くても、阿弥陀仏の本願があまりにも深いので、頼めば必ず浄土に往生できるのです。念仏を称えるのは気の進まないことでしょうが、称えれば、必ず仏の救いにあずかるのです。阿弥陀仏の功徳は莫大なのです。ですから、阿弥陀仏の本願に出遭うことを、大切に喜ぶべきなのです。また妄念は、本来私たち凡夫に備わったものです。臨終の時までは、私は妄念の凡夫なのですと自覚して、一向に念仏すれば、来迎に出遭って、蓮の台に乗るときにこそ、妄念をひるがえして、さとりの心を持つことになるのです。妄念を持ったままで称えている念仏は、泥の中に育ってもよごれに染まらない蓮のように、必ず浄土に往生するのですから、絶対に疑ってはならないのです。妄念があるという事実を嫌わないで、むしろ、真実の信心が浅いのだと嘆いて、心をしっかりと保って、南無阿弥陀仏の名号を称えることが大切です」

源信和尚没後千年、源信（恵心）和尚より源空（法然）上人へ、そして親鸞聖人に受け継がれたお念仏のみ教えを繙いて、心新たに前進していきたいものです。

源信和尚がすごされた比叡山横川

「梵天勧請」

釈尊シリーズ⑧

三十五歳の釈尊は、十二月八日の朝、「縁起の道理」に基づき、佛陀（目覚めたもの）となられました。そして菩提樹の下でしばらくひとりでそのさとりの法の深いよろこびをあじわっておられました。しかしそのうち「私のさとったこの法はあまりにも難しすぎる。誰がこの法を理解できるのか」と釈尊はさとったよろこびから絶望の淵へと落ちて行かれました。そして「そうだ。きっと人々に説くことは不可能だ。このまま自らの内深くに閉じ込めておこう」とさえ思われました。

ちょうどそのとき、梵天という神が釈尊の前に現れ「世の中にあなたの説かれる法を待っている人がいます。その人のためにもあなたのその法をお説きください」と何度も何度も勧め請われました。梵天の勧請（要請）は釈尊のみ心を強くゆり動かしました。そして釈尊はそこで初めて立ち上がり「私がみつけた本当の智慧は私一人のものであってはならない」と説法の決意をされることになります。その一歩が四十五年に及ぶ布教の旅の第一歩となったのです。

梵天は当時のインドの神々の中での最高神であり、この世界の主であり、人類の代表者として人々に信仰されていました。その梵天が説法を勧請することは、すべての人類が説法を勧請したことを示しています。

人は誰もが自らに執着し「無明の闇」の中で苦しみます。釈尊の説法を聞くこともなく、聞こうともしないような人生を歩んでいます。

しかし、その心の奥では人は誰でも真実の法を求める願心を必ず持っています。釈尊がその願心を信頼する心と、それに応え説いていかなくてはならないという決意を私に教えてくださるのが梵天勧請の物語であります。

釈尊が説法を決意されなければ、私たちはそのみ教えに出遇うことは出来なかったでしょう。その意味において、神話的に物語られている梵天勧請の説話は、私たちの人生において、大変重要な意味を持つ物語であるといえます。（教学院第三部会）

WEB VERSION

WEB VERSION

リレー法話

いのち

誓元寺衆徒　栗原妙直

先日、あるお同行の四十九日法要に参らせていただいたときのお話です。休憩の際、施主である息子さんが亡くなられたお父さんについてお話をしてくださいました。息子さんによると、お父さんは胃がんが見つかった当初、全摘すればまた元気になれるとお医者さんから言われていたそうです。ところが、物を食べることができなくなってしまったことで、あっという間に体力が衰えてしまい、手術をすることもなく亡くなられてしまったそうです。その様子をすぐ側でご覧になった息子さんは、「今まで当然のように思っていましたが、食事ができるということがどれだけ有り難いことか、その食事がいのちにとっていかに大切であるかを父が教えてくれたんです」と話してくださいました。

食前の「いただきます」、食後の「ごちそうさま」は、多くの動植物や、その食事に関わってくれた沢山の人々に対する感謝の気持ちです。たとえば、私は毎年地元の畜産業の追悼法要に参らせていただくのですが、その市だけで年間約九万頭の牛や豚など、食肉となった家畜のいのちが弔われます。そして、その現場に関わった沢山の人々が追悼に訪れます。私たちはそうして食卓に運ばれたお肉を、「いただきます」と手を合わせていただいているのです。ところが煩悩具足の私たち人間は、日々の生活の中で、いつの間にかその行為や食事そのものを日常の当たり前のことと感じてしまい、そのことの有り難さを忘れがちになってしまっているように思います。

よくよく考えてみると、同じことがいのちに関わるすべてにおいて言えるでしょう。そもそもこの世に生を受けたことも、食事をはじめ、様々な縁の中でいのちが今こうしてあることも、当たり前のことは何一つありません。しかし、人間がそのことに気づくことができるのは、大抵の場合、それが当たり前にならない状況におかれたときです。そこではじめて有り難さに気づき、同時に絶望や焦り、恐怖を覚えたりするのです。それが私たち人間のあり方でしょう。

そんなどうしようもない思いを抱いてしまう私たちを見抜き、そのままに受け止め、常にはたらき続けてくださるのが阿弥陀さまです。私たちのいのちは、様々なご縁に生かされていること、そして阿弥陀さまに照らされて今こうして有り得ていること、その有り難さ、尊さに改めて気づかせていただいたご縁でした。

WEB VERSION

親鸞聖人ご旧跡を訪ねて

第五回　三夢記

この夢について記された本山につたわる親鸞夢記が仏教文化講座開催中、宝物館にて展観されていたのはご覧になられましたか。

先号で紹介した比叡山大乗院をはじめ、磯長の御廟や六角堂で親鸞聖人がみられた夢が、信仰の転換点として、よくとりあげられています。

さて、磯長の御廟は叡福寺という真言宗のお寺の境内の奥にある聖徳太子のお墓です。

ここには親鸞聖人をおまつりする見真堂もあります。

見真堂に安置されている親鸞聖人は八十八歳の時にこちらのお寺にお参りされた時に自身で彫られたといわれている木像です。

お参りに訪れた時、ちょうど修復工事期間ということで、親鸞聖人に宝蔵でお会いすることができました。照明も明るく堂内で拝むより細かいところまで拝見することができました。

叡福寺は近鉄喜志駅から金剛バスで太子前下車すぐです。（山川蓮生）

磯長聖徳太子廟

汗を流して清掃奉仕

ご奉仕ありがとうございます。（敬称略・奉仕日順）

六月　西蓮寺・本覚寺・三重長寿会・正圓寺・常教寺・海念寺・西林寺

七月　法林寺・光明寺・常寶寺

八月　熱中症予防のためお休みです

親鸞聖人のみもとで汗を流しませんか。ひとりひとりの力が合わさり本山が護持されています。お檀家さま・お同行さまだけはなく一般の団体の方にもご来山いただいております。お申し込み、お問い合わせは宗務院庶務部までお願いします。

清掃奉仕・おみがき

WEB VERSION

WEB VERSION

こんな行事がありました

仏教文化講座

●今年も**仏教文化講座**が盛況のうちに幕を閉じました。毎日百名あまりの聴講で高田会館ホールが熱気にあふれます。

内容の濃い話を聴き終え、ふとふりかえると、背後には蓮池のハスが咲き乱れていました。

初日となる八月一日は法主殿御親講ということで、昨年にひきつづき高田の門流とはちがう明恵上人を通して私たちの信仰にアプローチをする内容で、新鮮な感じをうけたのではないでしょうか。

二日は小山聡子先生による呪術が盛んな時代に現れた親鸞聖人のお念仏の教えについて社会的背景とともにお話いただいきました。

三日は藤本淨彦先生に檀信徒研修会や坊守婦人会合同研修会でもとりあげた源空聖人の言葉から生き方の指針をお話いただきました。

四日はケネス田中先生にアメリカ仏教を通じて今日の仏教のありかたについてご紹介いただきました。

五日は高田派の堤正史先生に明治の真宗学者である清沢満之のご紹介をいただいきました。

はっとする話があったり、新たに気づきをえたりして自己啓発にもつながるこの講座は、この夏で九十一回を迎えています。来夏も八月一日から五日に開講されますので、どうぞ予定をあわせてご参加ください。

●七月中旬には高田会館ホールで行われた旅してゴメン色紙展や**蓮フェスタ**にあわせて、呈茶をしました。蓮を眺めながらお茶をいただく時間は素敵なものになったのではないでしょうか。

蓮フェスタ

●**歴史まるごと体験塾**が本山を会場に今年も夏休みに開催されました。

綺麗になった食堂（じきどう）に宿泊して昔の寺内町の生活を感じる二日間です。

朝のお参りや、御影堂の掃除なども体験したり、境内や寺内町をめぐったり盛りだくさんの二日間です。対象が五年生・六年生と限られますが、来夏も開催される予定です。どうぞ、予定に入れておいてください。

歴史まるごと体験塾

WEB VERSION

WEB VERSION

本山にお参りしましょう

ほとけさまと過ごす贅沢な時間

十一月三日・四日は本山境内が大勢のお参りの人で賑わう納骨堂法会が厳修されます。今年も亡き人をご縁にして大勢の参詣がみこまれます。ただ、それに反して世の中の死生観は急速に変化しているように感じます。

特に葬儀を軽視するような風潮が都市部を中心にみられます。中には長生きするようになったから故人がこの世に縁のある人が少なく葬儀に人があつまらなくなってきているという人もいますが、それだけではないように思えるのです。

納骨堂法会にお参りをしながら、本来の葬儀のありかたや、これで良いのかということを改めて考えてみませんか。そして、今を生きる私のいのちを見つめ直すご縁にしていただければ幸いです。

のんびりとお参りするのならば、納骨堂法会前後に勤まる、資堂講法会や秋法会に本山に合わせてお参りいただくのも良いかと思います。

また、年があければすぐに報恩講です。忙しい時期ですが、報恩講にもお参りください。七夜八日にわたってお勤めされるお七夜さんですから、その間にご都合をつけて是非ともご縁をお結びください。

第四十七回お七夜献書展課題

幼稚園　きく

小学一年生　なも

小学二年生　六字

小学三年生　大船

小学四年生　三悪道

小学五年生　方便化土

小学六年生　師主知識

中学一年生　往生安楽国

中学二年生　三千大千世界

中学三年生　七宝講堂道場樹

高校・一般

（ア）東方諸仏国　其数如恒沙
彼土菩薩衆　往覲無量覚

（イ）不了仏智のしるしには
如来の諸智を疑惑して
罪福信じ善本を
たのめば辺地にとまるなり

本山では、来年一月九日から十六日に厳修される報恩講に向けて献書を募集いたします。ご参加をお待ちしております。募集要項は各寺院宛、書道教室宛のチラシにてご案内いたします。個別に案内を希望される方は宗務院までお尋ねください。提出期限は平成二十九年十一月三十日です。

●行事案内

九月二十日～二十六日　讃仏会

十月一日～三日　資堂講法会

十月十七日～十八日　坊守婦人会合同研修会

十月二十五日　第65回檀信徒研修会

十一月三日・四日　納骨堂法会

十一月五日～十日　秋法会

十二月八日～十日　中興上人御正当

高田本山
Senjuji
三重県津市一身田町2819
真宗高田派本山専修寺

寺院名